

やさしい記録

合川小学校 四年

ぼくがまだ保育園のころのことです。クリスマスが近い雪がふる朝でした。その日もいつもと変わらない日だと思っていました。朝ごはんを食べて、保育園に行こうとしていたら、お母さんのけいたいが鳴りました。それは、一人でくらしているおばあちゃんからでした。電話に出ると、おばあちゃんの声がいつもとちがって、とても苦しそうでした。ぼくたちは急いで車に乗って、お母さんは、車から119に電話をかけて、すぐおばあちゃんの家に行きました。たくさんの消防車や救急車がきて、お母さんの顔がいつもとちがったのでぼくはこわくなりました。消防の人がハンマーで窓ガラスを割りました。家の中では、おばあちゃんがたおれていて、飲みかけのコーヒーが床にこぼれていました。おばあちゃんは、救急車で病院に運ばれたけど、亡くなってしまいました。理由は、血管がさけたからです。おばあちゃんは病院ぎ

らいで、ずっと具合が悪かったけど、病院に行っていなかったそうです。お母さんには、「病院に行っているから大丈夫。」と言っていたそうです。おばあちゃんは、クリスマスの日、ぼくたちに食べさせるケーキやオードブルなどのごちそうを準備してくれていました。

おそう式には、親せきがたくさん集まりました。みんなでご飯を食べたり、いとことゲームをしたりして、その時のぼくは楽しんでいました。次の日の朝、お母さんから「おばあちゃんとはもう会えんとよ。」と言われて、少し悲しくなったのをおぼえています。

あれから何年かたって、ぼくは十才になりました。人の命の大切さが少しずつわかるようになってきました。命は一つしかありません。ゲームのようにもどってくることは絶対にありません。でも、その人がそれまでやってきたことの記録は消えないとぼくは思います。

おばあちゃんはぼくにやさしい記録をたくさん残して

くれました。あの日にもどれるなら、最後に
「おばあちゃんありがとう」と言いたいです。
そしてぼくもこれからやさしい記録をたくさん
残していきたいです。